

花の歌 歳時記

前田康子

啓蟄けいちつ。この言葉が嫌いという女性が多い。虫のいない冬はほっとするのに、もう啓蟄か…と。紋白蝶もんしろちょう、天道虫てんどうむし、蟻達あぎたちが公園に現れると子供たちは嬉しそうである。友達が帰ってきたように、指先で触れにゆく。

という私にも嫌いな虫がある。百足むかひである。旧街道沿いの古い家に住んだ時、大百足が庭を横切るのを見た。その辺りは特に百足の多い場所だとあとから聞いた。梅雨時になると、「百足ごろしあります」と薬局に貼り出されるのだから。

百足は益虫である。庭を掘った時、親百足が大事に卵を抱いて土の中にいた。そんな姿を見てもあの脚の多い姿はやっぱり怖い。

「脚があるよりない方がよっぽど怖い」蛇嫌いの知人が百足の話をするといつも言う。

「跳ぶからやっぱり蛙かえるが気持ち悪い」と別の友人が言う。いや蛞蝓かたむすが、ゲジがいやだ。生き物の何倍もある人間が言うのだから、何ともおかし。



絵・ツバキ／小柳吉次

辛夷

辛夷の花に出会うと、元気が出てくる。枝が大らかに空に広がっていて、木一杯に花がついている。冬の間、ひと木もじっと耐え

ていて、力が一気に湧き起った感じがする。はなびらの伸ぶる力はふる殻をおし破りたり真白き辛夷

玉城 徹 著

この歌にもそんな花の感じがよくでていいる。辛夷の花は、つぼみの形が拳に似ているところから、その名がついている。ちょうど子供の手くらいの大きさである。

見はるかす山腹なだりに咲きてゐる辛夷の花はほのかなるかも

斎藤茂吉 著

はるかなるものの悲しさがよひて辛夷の花の一本が見ゆる

佐藤佐太郎 著

三月の山の木々は、いっせいに芽吹いて、林全体がぼんやりとした色合いを見せる。そんな早春に白く輝く辛夷の花は、夢のようにかなしく立っている。

水にある影もろともに暮れてゆくこぶしの花は星が照らさん

上田三四二 著

辛夷の白い花を星が照らす。絵画的な美しさのある歌である。辛夷のすべすべとした白さが、空に少し、遅れて暮れて行く。

こぶし
辛夷





かたくり

貴船きふねの方を何となく歩いてきた時のこと。
木の柵さきで囲いがしてあり、天然記念物のよう
に咲いていた花があった。それが初めて見た
かたくりの花である。たった一輪、「絶対に摘
み取らないで下さい」という看板の傍らに咲
いていた。

巖角につみてかなしもひと茎にひとつ花 咲くかたくりの花

古泉千樞こせんちか『屋上の土』

かたくりは董むらほど小さくなく、ユリ科であ
るが、それほど大きくなく、手に摘むと、ちょ
うどよさそうな大きさの花である。しかしま
だ手に摘んだことはない。二十一世紀にはま

すます貴重な花になっていくような気がする。

日中を風通りつつ時折りにむらさきそよ

◇堅香子の花

宮 柁二みやのせ『忘瓦亭の歌』

眼鏡にて近づきゆけば恋の花の感傷もち て堅香子の花

同

「かたかご」という古名の響きがいい。「かた
こ」という名もある。昭和五十年、宮柁二、
六十三歳の歌。

手くらがりほどの夕べが来ておりぬカタ クリの咲く林の根方

吉川宏志よしかわひろし『未刊歌集』

作者が初めて東北の山で、かたくりの群落
を見たときの歌。美しさに圧倒されながらも、
かたくりの控えめに咲く姿を、静かに表現し
ている。手くらがりという言葉のやさしさが、
読み終わっても心に残る。

二年間、読んでいただき本当にありがとう
ございました。

(まえだ・やすこ「塔」会員)



かたくり